

鹿児島県三島村長

大山 辰夫氏

肖像

九州・沖縄

自然あふれる硫黄島、黒島、竹島で構成する鹿児島県三島村。人口は約400人と県内最少の自治体だ。村長の大山辰夫(56)の信条は「思い立ったら即、実行」。離島振興にあの手この手の作戦を繰り出し、「過疎の島をアイデアで生き抜く」と精力的に活動する。

島内最高峰の硫黄岳からは今も白煙が噴き出る硫黄島。大山が生まれ育ったこの島は平安時代の僧侶、俊寛の流刑地だったと伝わる。歌舞伎俳優の十八代目中村勘三郎は2011年、同島で歌舞伎「俊寛」の野外公演を行った。

進む過疎化 定住対策に力

公演は、村議だった大山が当時の村長と共に勘三郎側と交渉し、1996年に実現。3年前に2度目の公演を果たした。勘三郎が所属した芸能事務所、ファインウッド(東京・中央)の田中亨社長(69)は大山について「言ったこと

離島振興 発想で勝負



は必ず実行する。いずれまた野外公演に協力したい」と信頼を寄せる。三島村の悩みは過疎化だ。硫黄の採掘が盛んだった60年

には約1300人が村に居住していたが、今は当時の活気はない。「村の人口を増やしたい。それも若い世代だ」。昨年12月、村長に返り映いた

大山が最も力を入れるのが定住対策だ。4月に定住促進課をつくり、定住者には「牛1頭または50万円」を支給するユニークな施策を実施。7世帯が移り、昨年末に359人だった人口は今年9月1日には379人へ増えた。大山は「村長の任期中に最低でも400人にする」と話す。

地方交付税算定 見直しで成果

大山の成果のなかで、全国の離島関係者を驚かせたのが地方交付税の算定方法の見直しだ。離島への交付金は本土との距離に応じて算定されていた。だが、本土との距離では三島村とほぼ一緒の種子島は航空路も船舶路線も充実。一方、三島村は現在も鹿児島市と結ぶ村営フェリーの週3便の運航に頼るのみ。「おかしいじゃないか」。大山は距離ではなく交通手段の利便性を考慮に入れて算定するように総務省と何度も掛け合い、08年に認められた。

大山の父は漁師で、母は小さな雑貨店を営んでいた。大山は東京で専門学校を卒業後、サラリーマン生活を送っていたが、母が病に倒れたのを機にUターンした。漁師をしながら雑貨店を営み、「地域を元気にしたい」と青年団活動にいそしんだ。愛嬌(あいきょう)ある風貌で明るく、面倒見も良い大山は背中を押される形で村議になり、05年に47歳で村長に初当選した。

「鹿児島市から約100キロにある過疎の離島の現状をわ

おおよま・たつお 1958年(昭33年)鹿児島県三島村生まれ。80年東京商科大学(現在の東京商科・法科大学)専門学

校卒。82年に家業の酒・雑貨店を継ぐ。91年三島村議選で初当選。2005年村長選で初当選。13年の村長選で返り咲き。

なり村民との交流が少なくなくなっていた。08年の村長選では落選。また島で漁師として働いたが、周囲の支持者から「年齢もまだ若い。村の将来のため頑張れ」と後押しされ、昨年11月にリベンジを果たした。アフリカの打楽器「ジャンベ」を国内外の観光客らに教える村営スクールや、全国からヨットマンが競う「ミンマカップ」など、大山は交流人口を増やすコンテツをいくつもPRする。「イベントに磨きをかけ、人を呼び込む仕掛けをつくる」と意気込む。村の一大プロジェクトとして期待がかかるのが、硫黄岳の地熱発電を利用した液化水素製造計画だ。液化水素は燃料電池自動車向けの新エネルギーとして有望視される。川崎重工業が村営地で現地調査を実施中だ。「20年の東京五輪では、燃料電池自動車が選手村を走る。そこに使う水素は純・三島村産にしたい」。離島の未来を背負い、大山の疾走はまだ続く。 敬称略 鹿児島支局長 近藤英次 写真 善家浩二